

視 察 調 査 報 告 書

委 員 会 名	文教経済委員会
参 加 者	委 員 長 蜂須賀 喜久好 副委員長 杉山 智騎 委 員 柳 賢一 前田 麗子 土谷 直樹 加藤 嘉哉 野々山 雄一郎 加藤 学 加藤 義幸
視 察 日 時	令和6年1月24日（水）10:00～11:30
視察先・概要	静岡県静岡市 人口：680,913人 世帯数：233,246世帯 面積：1,411.93km ²
視 察 項 目	部活動の地域移行について
視 察 概 要	1 静岡市の部活動を取り巻く現状 (1) 部活動の位置づけ 教育課程外の活動であり、学校の判断で設置するもので、任意加入である。学校教育の一環として実施しており、加入率は74%となっている。 (2) これまでの取組 ・平成28年 静岡市総合教育会議を設置、外部指導員の配置 ・平成29年 部活動ガイドライン策定 ・平成30年 部活動応援隊開始、外部顧問の配置 ・令和元年 静岡市立中学校部活動ガイドラインを策定 【ガイドラインのポイント】 ア 人間形成に資するものとする。 イ 部活動指導5原則（①生徒が主人公の部活動とする。②体罰や暴言の禁止を徹底する。③発達段階や健康状態を考慮した適切な活動量で行う。④安全管理を徹底する。⑤指導者も生徒も達成感を持って取り組める活動とする。） ウ 部活動の活動日の設定（活動日：平日3日、土日どちらか1日） エ 部活動の指導者の配置（教育委員会が行う研修を受講し、認められたものにライセンスを発行し、外部顧問とする） (3) 部活動が抱える課題 部員の減少、志向の混在、選択肢の減少、指導者、休日部活動の地域移行。学校単位での部活動では、将来にわたって活動をすることは難しい。 2 静岡市の方向性 (1) 残したい三つの価値と期待する効果

ア スポーツ・文化活動の機会＋学校規模による機会格差解消、
専門性、安全性の保障

イ 人間形成＋多様な大人からの学び

ウ 居場所づくり＋地域コミュニティ

(2) 改革の方向性

本改革によって地域に多様な活動場所が生まれ、子供たちの興味関心や志向に応じて、選択できる環境の構築を目指す。その選択肢の一つとして、市が主体となり地域や学校の協力を得ながら教育的意義を有する地域クラブ「シズカツ」を展開。

(3) シズカツ・ポリシー

- ・ 目指す子どもの姿「たくましく しなやかな子どもたち」
- ・ 教育委員会：持続可能で健全な活動を保障
- ・ 学校：シズカツの活動環境を支援
- ・ 教員：生徒の活動を共に支える
- ・ 指導員：生徒の成長をやりがいと感じる指導者
- ・ 関係団体：望ましい成果発表の場
- ・ 保護者：生徒や指導者の最大のサポーター

(4) シズカツの目指す姿

家庭状況や学校規模に左右されず、子どもたちの豊かな体験や学びを保障（志向性でいうとバランスコース。スポーツの体験会などのエンジョイコースと民間クラブなどで専門的に競技力を高める専門コースの間に位置する）

学校単位の部活動、43校約430部から、市の事業として、学校の枠組みを越えた市内15エリア約200クラブへ。

3 課題に対するシズカツの方策

部員減少、種目の選択肢、志向の多様化はエリア制により、指導者の不足・質の確保、受皿（運営団体）、施設の確保は市事業での運営により対応。

(1) 市民参画の機会拡大

小中学校のみならず、スポーツ協会や各種目団体、また自治会や地元企業、大学へも呼びかける。

(2) 指導者の育成について

指導者は各運営団体が任用するが、資質を担保するため、市教育委員会主催のライセンス認定講習会への参加・認定を経て配置する。

(3) 指導員任せにしない体制

指導員だけで運営するのではなく、指導員からの相談に乗ったり、情報共有を行う地域マネージャーや、種目ごとに、支援やチェックを行う種目リーダーを設置したりし、指導員任せにしない複数体制でのサポートを実現する。

	(4) 令和8年度までの実施イメージ 平日は学校教育の一環である部活動、休日は社会教育の一環であるシズカツとする。
所 感 ※視察しての感想や岡崎市への提言など	・静岡市は種目リーダー、地域マネジャー、地域指導員と役割を決めて、縦串と横串で上手くシステム化しており、素晴らしい仕組みである。本市でも課題になっている部員の多い学校同士のエリア別統合について、静岡市ではセカンドチーム制を取り入れており、同じエリアから複数のチームが大会に出場できる形式になっている。本市でも取り入れるべき考え方や仕組みが多く、本市でも検討をされたい。 ・部活動の地域移行への改革を進めるに当たり、静岡市では児童生徒、保護者、教員等、延べ7,581名に対するアンケートを2年間にわたり実施し、部活動改革検討委員会、及び総合教育会議等を実施し、静岡市の方向性を定めた。本市についても、改革を進めるに当たり、関係者へのヒアリング、実践研究を行いながら、本市の方向性を見いだす必要性を感じた。改革の具体的な方向性としては、静岡市が主体となり、地域や学校の協力を得ながら教育的意義を有するクラブ、シズカツを展開されていることが特徴的である。令和12年までに、これまで学校が担ってきた部活動から、地域一体となって支えるシズカツへ移行する取組である。あるべき姿を明確にした上で、関係者にとっても意義ある活動にしていこうとするこれらの考え方は、本市にとっても重要なコンセプトになり得るため、一考すべきである。特に印象に残ったものとして、指導者の育成方法の中で、市ライセンス認定講習会を実施し、教育的資質を持つ指導者の育成の有効性、及び有効な研修内容の構築により、質の保障を目指しているところである。本市においてもシズカツのような市独自の制度導入も鑑みながら様々な実証を繰り返し、同時に指導者の質の保障にも目を向けていくことで、真の部活動の地域移行の意義を見いだせるのではないかと感じる。 ・どの地域も本質的な問題は同じであるが、静岡市ではシズカツという、市が実施主体となり、運営を事業者へ委託するという形であった。本市は第1段階「子供の活動」の移行、第2段階「活動場所」の移行、第3段階「運営主体」の移行としているが、静岡市は、活動場所は学校と定め、運営主体の移行をシズカツとして実証実験を実施しており、限定的に休日の運営から移行を始めた。本市への提言として、実施して分かる課題に対してしっかり評価をしつつ、適宜修正を行うことを恐れずにやりながら、本市にマッチする形をつくり上げられたい。 ・部活動は学校教育の一環として重要な役割を果たしているが、部員の減少、指導体制、種目選択肢の減少などにより、学校単位での部

活は将来にわたって活動を維持することが難しくなっている。静岡市では、部活動改革検討委員会、総合教育会議等を実施し、市の方針を定めた。市が主体となり、地域人材、保護者、民間が連携し、地域や学校の協力を得ながら教育的意義を有する地域クラブ、シズカツを展開。シズカツは家庭環境や学校規模に左右されず、子供たちの豊かな体験や学びを保障することを目指す姿としている。指導者の育成、また、指導員任せにしない体制づくりなど、これから進める部活動の地域移行で本市においても参考とし、検討すべきと考える。

- ・ 静岡市では現在、部活動については任意加入となっており、加入74%、未加入26%である。部活動の地域移行に伴い、持続可能な部活動と教師の負担軽減の両方を実現できる改革が必要。本市と同様、段階的な地域移行を計画しており、部活動から地域一体で支える、シズカツを目指す。シズカツにより、現在43校約430部ある部活動を市内15エリアに分け、約200のクラブとして展開する。これにより指導者の確保・育成を推進する。本市同様、まずは手探りの中、地域移行を進めていく。あくまでも主役は生徒であり、生徒の主体性、可能性、社会性を部活動の意義として取組を進める。本市においても、あくまで生徒が主役として地域移行への取組を進め、他市の事例を注視しながら、本市にとって最適な施策を期待する。
- ・ 静岡市では教員の兼業兼職希望者として112名、現状の部活指導員140名、想定される400名のうち148名が不足しているとのこと。市民参画の機会拡大として、地元企業76社による部活動応援隊の存在が大きいと考える。学校を含めた地域全体で子供たちの活動を支え、育てることに賛同する企業が部活動に携わり、企業名を冠にした大会・発表会があれば双方にプラスと考える。またアスリートのセカンドキャリアとして、また文化・芸術関連の裾野を広げたい団体など、指導員となり得る可能性を秘めた人々が多い。本市において、まずは必要な人員数を設定し、希望教員の数と希望種目を把握し、現状の部活動指導員の数を考慮し、何人が足りてないのか早急な推計が必要と考える。そしてその際には、スポーツ協会・団体、地域住民だけでなく、静岡市のように部活動応援隊として地元企業・地元事業者を巻き込むことが重要と考える。学校グループ分けエリア間での移動、適正な指導対価などの幾つかの課題もあるが、まずは種目別の指導者数の推計、そしてその数の確保への取組を最優先すべきと意見する。また、現在活動している地域スポーツクラブには、そのまま継続することも可能としながら、新たな部活動の形に参画してもらえるか意見交換すべきと考える。
- ・ 本市においては、令和5年2月に部活動地域移行に関する庁内検討会議、庁内外検討懇談会を設置し、検討を開始した。第1段階とし

	て、令和5年度から7年度までを子供の活動の地域移行（ブロック内に設置されている部活動から選択して入部することができる。）としてスタートした。静岡市は、平成28年より「学校の部活動の充実・課題解決」としての取組が行われており、地域移行についても、令和5年度よりエリア制（部活動の推進と既にシズカツ（休日の地域クラブ））の実証が行われるなど、先駆的な取組が行われている。令和8年度からの休日実施、12年度からの休日プラス平日実施のシズカツの取組は大いに参考となるべきものがある。 ・静岡市の部活動地域移行は、エリアをまたいでの参加は想定しておらず、自分のやりたい活動ができない生徒が出てくるのが気がかり。部活動指導員等のスタッフ集めも大変のようだが、待遇の改善等を図り、より魅力ある働きがいのある環境づくりが必要である。本市においては、エリア制を導入し、令和10年度までは学校管理下で行い、令和11年度以降は完全に学校管理外で行うとしている。静岡市でもエリア制を導入し、令和8年度からは、平日は学校部活動、休日は市全体の地域クラブであるシズカツとして地域移行し、令和12年度からは、シズカツに完全移行する。この間、指導者の育成、移動手段等、整理しなければならない課題も多く、難航も予想されるが、試行錯誤を繰り返して軌道に乗せられたい。
委員長の総括	文部科学省は教員の働き方改革を踏まえ、部活を学校単位から地域単位の取組にし、学校以外が担うこととした。そうした中、静岡市教育委員会は令和8年度からシズカツ（地域クラブ）として、平日は学校教育の一環として、休日は社会教育の一環として行う。一番の問題は、外部指導者と教員の関係が大変難しい。部活は、平日は学校で、各種大会はシズカツとして参加する。とりわけ、音楽は先生の能力、感性がとても強い部活で、教員指導者の協力が得られない。外部委託するにもプロポーザル方式や委託業者で決めると金額で入札してしまうため、委託業者の能力の判断が大変難しい。本市もこの問題に直面するのは間違いない。